

## どちらが欲しいか? 男児と女児

研究開発部  
宮木 由貴子

ここ数十年、年々生まれてくる子どもの数が減少してきた。2000年によやく下げ止まったものの、合計特殊出生率は1.36と、1人の女性が一生に産む子どもの数は1人強だ。その背景には、経済的な事情や教育費の問題、女性の就労との兼ね合いや1人だけに存分に愛情や費用を注ぎたいなど、様々な事情がある。そういった意味では、「産めよ増やせよ」の時代に比べて、女性が自分のライフデザインを主体的に考えられる時代になったともいえるが、それでもデザインの通りにならないのが「子どもの性別」である。

### < 女児人気の背景 >

男女の出生性比は、女児よりも男児が産まれるケースの方がやや多い(図表1)。これは、一般に男児の方が女児よりも生物学的に弱く、死亡する確率も高いことから、種の保存のために男児が産まれるケースが多くなっているというのが通説だ。種の保存だけでなく、家の存続という面から見ても、昔は男児を希望するケースが多かった。しかし「1人しか産まない」「1人しか産めない」といった状況下において、近年女児を希望するケースが多い(図表2)。女児を2人欲しいという希望も少なくないという。

親にとって、子どもの性別はその後の生活を左右する。まず、男児と女児では遊び方が異なる。コミュニケーションへの関心が子ども的高い女児では、「座ってお話をする」といった行為も十分「遊び」になるが、男児はとにかく元気に暴れまわって体を動かす方が好きだ。家庭内イベント

なども違って来る。女児のいる家では9割以上がひな祭りを祝っているのに対して、男児のいる家で端午の節句を祝っている割合は女児のひな祭りに比べて少ない(図表3)。また、性別によって、しつけや性教育の仕方も異なって来る。夫が多忙だったりシングルマザーだったりといった場合には、特に「男の子の教育」が女性にとって難しく感じられることも、昨今の女児支持につながっているのかもしれない。

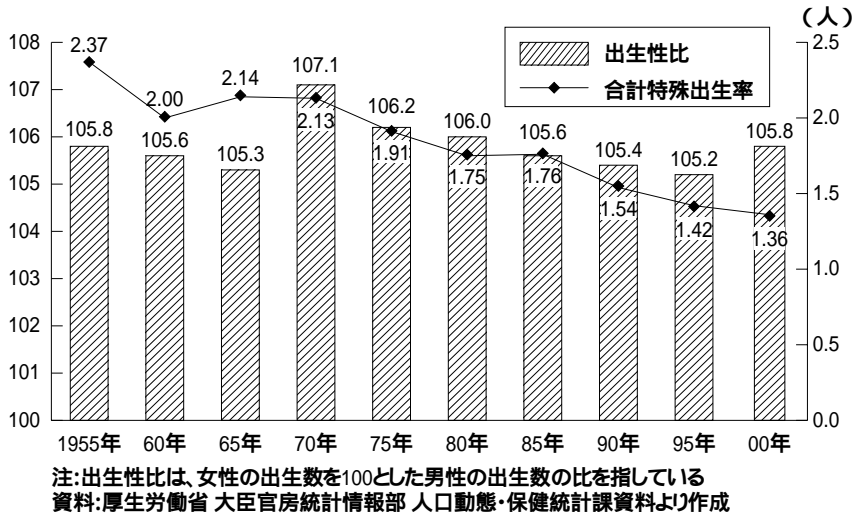
さらに、母親と女児はある程度の年齢になると「女性同士」としての仲の良い付き合いができるようになるケースが多い。相談事やショッピングなどをしてべったりと依存しあう母娘は、「一卵性母子」などと言われることもある。結婚後、新婚夫婦が頻繁に出入りするのには花嫁の両親の家で、嫁姑の折り合いが良くなければ夫も自分の実家から遠のきがちだ。昨今の結婚式では、泣いているのは花嫁の父ではなく、花婿の母だともいう。将来の介護についても、やはり嫁より実の娘に頼みたいというのが実情のようだ。

### < 唯一できない「ライフデザイン」 >

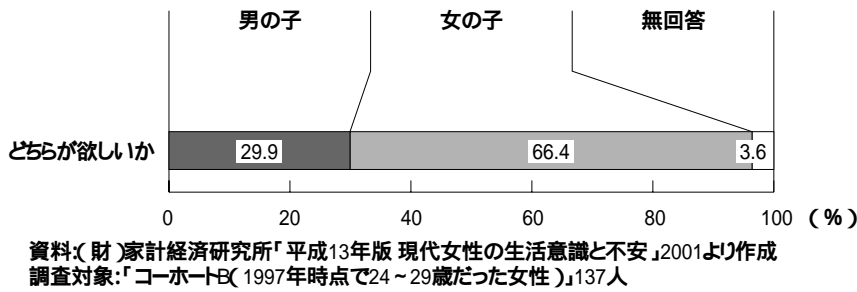
「男女の産み分け」については、書店などにかの数のマニュアル本が置かれている。それらの産み分け法は、医学的根拠がありそうなものから迷信に近いようなものを含めて、おおむね個人ができるレベルのものとなっているが、実際に成功率が高いという方法はいまだに聞かない。かといって、医学的な遺伝子操作で産み分けを行うことに関しては、費用もかさむとあってか抵抗が強いようだ。

結婚年齢や子どもを産むタイミング、子どもの数など、女性のライフデザインはかなり主体的になってきた。将来的には、子どもの性別も「ライフデザイン」の一環として操作される時代になっていくのだろうか。

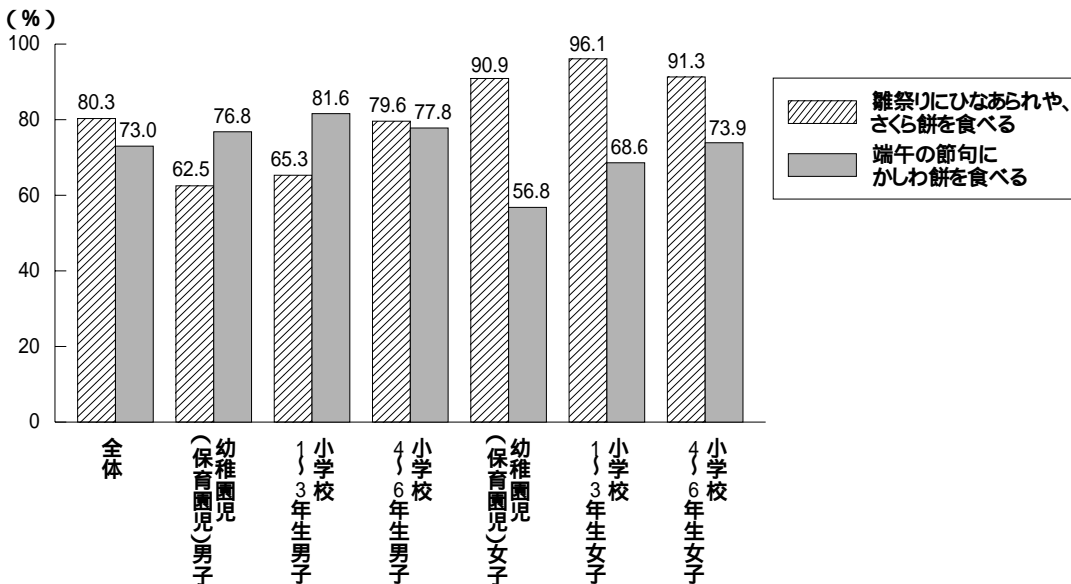
図表1 合計特殊出生率と出生性比の変化



図表2 男児と女児のどちらが欲しいか



図表3 家庭におけるイベント



資料:(社)家の光協会「第4回家の光生活文化クイック・リサーチ『食教育』、『農業体験学習』に関する意識調査」2001  
調査対象:幼稚園児(および同年齢の保育園児)から小学6年生の長子を持つ、首都圏在住の男女300人、2001年1月調査